

博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	PIZZICONI Barbara (ピッツィコーニ バルバラ)
在住国名	イギリス
所属・役職	ロンドン大学 アジア・アフリカ研究学院 日本語応用言語学教授
招聘回(招聘研究期間)	第12回 (2018年03月01日～2018年08月31日)
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	日本語の待遇表現についての言説
研究目的	本プロジェクトでは言語学、批判理論、記号論、民俗学、社会言語学の成果を活かした多面的なアプローチに基づいた、日本語の待遇表現の再検討を提案する。現代の言語使用の実際を観察し、言語使用者のメタ言語的・メタ語用論的解説から得られる言語イデオロギーと同時に、他の言語景観、つまり視覚的、物理的生産物の記号論的体系をも探求することを目的とする。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>(研究計画の記述はここで省略します)。</p> <p>研究期間の前半は、主に最新の待遇表現、及び、ポライトネス関連の資料を踏査しました。言語学的観点に基づいた先行研究は、ここ数年で数多く出版されていきましたので、まず、その概念の変遷の探求から始めました。記述言語学、社会言語学を始め、批判会話分析、方言研究、アイデンティティーの研究成果も調査しました。次に、視野を広げるため、隣接する分野にも目を向け、社会学、歴史学、人類学などの論文も踏査しました。在期間の多くをこのような文献研究に費やしましたが、後半で行ったデータ収集のための準備として、方法論的な側面を巡る文献も探索しました。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>この研究の出発点は、研究のレベルでも、教育のレベルでも、待遇表現というものは「緩く」または偏った観点から議論されてきたのではないかという疑念でした。つまり、待遇表現、特に敬語は単純に「日本語」の一つの特徴として議論されて、「標準語の日本語」という修飾句を付け加えた場合でも、日本語が使われている場面では敬語も普遍的に、均質に使われるかのように、議論されてきました。今回、従来からある「日本語の敬語」という概念を批判する先行研究を日本語論文でも英語論文でもいくつか読み、学術研究の世界では日本語の敬語に関する見方が変化してきていることに刺激を受けました。従来の研究で対象となっている「日本語」というものは、実際は「標準語」というバラエティだけを指しており、さらに言えば、その多くの場合、東京で使われる言葉だけを指しているのが一般的です。しかし、その敬語は社会の中で決して均質に使われているのではなく、話者の持つ、地域、世代、ジェンダーといった社会グループを維持するためのイデオロギーによって、敬語に対する評価も様々であると言えます。京都の「ハル」敬語も「標準語の枠組みにはまりきらない [...] 方言敬語」と位置付ける研究はありますが(例えば、辻2009)、本研究では社会集団で使われる言葉は、確定的に社会集団のメンバーシップで決まるものではなく(例えば、話者は女性だから女性らしい言葉遣いをするという結論づけずに)、言葉についてのイデオロギーを媒介したものであると考え、同じ社会集団内でもバリエーションが見られるものだと仮定することができます。</p> <p>本研究の一部では言語使用者の言葉と言葉遣いについての考え方、思い入れ、意識、価値観と言葉遣いについて</p>	

の言説を面接調査(半構造化されたインタビュー)を通して探求しました。京都方言話者の話に現れる標準語や関西弁などについての言説と別のバラエティーの話者による京都方言についての言説も調査対象としました。インタビューは1ヶ月前(7月中旬)から本格化、この報告書を書いている時点で約25人ですが、これからの2週間でさらに数人に貢献していただく予定です。

ここで、インタビューを重ねながら、参加者の敬語についての言及でいくつか気づいたところを以下に述べておきます。これら一は、観察して得た現時点での直感的知見で、今後の体系的分析の段階で得られる洞察とは違ってくる可能性があることを付記しておきたいと思います。

- 敬語は上下関係のみならず、親疎関係によっても左右されているにも関わらず、参加者の多くにとって、敬語は上下関係の表示とのみ意識され、そのように位置付けられている。
- 丁寧語的使用より尊敬語的使用の方が意識されやすい。丁寧語は無標の形で意識されないというこの観察は現在の敬語の丁寧語化論を裏付けるものである。また、このことから、これらの語法は「敬語」という総称で、近代言語学的なイデオロギーに基づいて、研究され、指導されているが、現実の話者の意識では丁寧語と尊敬語は性質的に異なると考えられると言える。
- 言葉遣いの有様を記述・説明する言説の一つは「日本は縦社会」であるという論である。
- もう一つの論は敬語は「相手を敬う言葉である」。これも「日本文化」の特徴として位置付けられる。
- 標準語と方言の間に言語体系的相違があり、その相違には社会的に標準語は方言に優るというプレステージの差もある。それと同様にそれぞれのバラエティーに独特な言葉遣いにも価値の差があると意識されるが、その評価は様々である。京都言葉を母語とする者は、標準語(の敬語)心理的距離感を抱き、抵抗感、劣等感を感じたりして、ともかく何らかの隔たりを感じており、肯定的なイメージを述べる人は少ない。標準語の「敬語」は「美しい」という人でも「当て付けがましい」、「過剰」なイメージを持っている。
- 京都方言の敬語についてははっきりした言説は見られなかった。強いて聞かれた時「ハル」を言及する人もいるが、「敬語」というものは根本的に標準語の特徴と見る傾向がある。
- 京都言葉を母語としないものには、京都言葉は「魅力的」というイメージがある
- 敬語使用を話し手の立ち居振る舞いの一環として把握するのは若年層より中高年層の人に多い。

3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

・モノグラフを予定。詳細は検討中。原稿執筆中。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・検討中、帰国後まずロンドン大学で発表予定。

○その他の活動

・

4. 今後の活動予定

サバティカルが終わり、ロンドン大学に戻り講義と学科職務に携わりながら、本研究の成果の出版準備をする予定。